



第22回 日本抗加齢医学会総会

The 22nd Annual Meeting of the Japanese Society of Anti-Aging Medicine

ミニセミナー 4

『薬物相互作用の過去・現在・未来』 - 食品・サプリメントと医薬品との相互作用 -

日時

2022.6.18(sat) 14:30-15:00

会場

ミニセミナー会場 (大阪国際会議場 3F イベントホール B-E)

座長

森下 竜一 先生

大阪大学大学院医学系研究科臨床遺伝子治療学寄附講座 教授

演者

堀 美智子 先生

医薬情報研究所 / 株式会社エス・アイ・シー 取締役 / 医薬情報部門責任者

ご演題・抄録

『薬物相互作用の過去・現在・未来』 - 食品・サプリメントと医薬品との相互作用 -

栄養素と医薬品の相互作用といえば、ニューキノロン系抗菌剤やテトラサイクリン系の抗生物質と、カルシウムなど金属カチオンの相互作用が古くから知られている。キレート形成により薬の吸収が減弱する。そこでカルシウム等のミネラルを多く含む食品とは一緒に摂取しないようにとされている。薬の服用については、多くの場合、食後の服用が指示される。薬の服用量は、生物学的利用率すなわち食事の成分と結合して吸収されなくなる量を計算して決められているので、食後に服用しても、特に食事中にカルシウムが多すぎるようなことがなければ、薬の働きは影響がないといえる。しかし、食事中のカルシウムの吸収量は影響を受ける。テトラサイクリン系抗生物質は、ニキビなどの治療目的で、長期間使用される場合には、カルシウム等のミネラルの欠乏に配慮することが必要となる。この薬の長期連用時には、カルシウム等の積極的な摂取を、薬の服用時間と間隔をあけて行うことが推奨される。

また、医薬品による味覚障害という副作用は、血中の亜鉛との相互作用により亜鉛不足が引き起こされる可能性も高く亜鉛の補給が、副作用の軽減につながる。しかし、亜鉛の過剰摂取は銅不足になり問題となる。栄養素同士の相互作用に関しても注意が必要である。さらにスタチン系薬剤は、コエンザイムQ10の体内での合成を低下させる。加齢にともない、さらに薬の影響でコエンザイムQ10が低下するとむくみなどの有害事象を引き起こす可能性が高くなる。このように、薬と栄養素との相互作用、あるいは薬の作用は、薬の視点からのみ考えるのではなく、栄養素の側からも検討する必要がある。

また、最近では、特定の機能をうたえる保健機能食品 (①特定保健用食品 ②栄養機能食品 ③機能性表示食品) などがあり、特定保健用食品や機能性表示食品の場合は、その機能と医薬品との併用による作用の増強などといった相互作用に対しても注意が必要となる。そこで、具体的な相互作用を例にあげながら、栄養素と薬の相互作用についての考え方を紹介する。

共催：第22回 日本抗加齢医学会総会 / 株式会社カネカ